

アトモスフィア

英文日本学士院紀要について

杉 村 隆*

日本学士院は上野公園にある。JR 上野駅の公園口を出て西南の森の中に日本芸術院がある。公園口の前方には国立西洋美術館、動物園があり、線路に沿って科学博物館の裏手を北進し東京国立博物館、東京芸術大学などのある通りを左折した角に、日本学士院が静かにたたずまっている。日本学士院の第1部（人文科学部門）は、第1分科（文学・史学・哲学）、第2分科（法律学・政治学）、第3分科（経済学・商学）から、第2部（自然科学部門）は、第4分科（理学）、第5分科（工学）、第6分科（農学）、第7分科（医学・薬学・歯学）から成る。全会員数は150名である。

少々、現在の日本で流行中のアトモスフィアと違うかもしれないが、この第2部で進められているのが、英文雑誌 *Proceedings of the Japan Academy, Series B (PJA-B)* の改革である。Series A は数学専門で存在感がある。日本の数学界が多くの人材を擁していることによる。Series B の Editor-in-Chief は日本生化学会名誉会員の山川民夫先生で、1ヶ月に1回、Editorial Board Members の中で、関東在住の古在由秀（第2部長、天文学）、豊島久真男（ウイルス学・腫瘍学）、大塚正徳（薬理学）、本多健一（応用化学）、別府輝彦（応用微生物学）、山崎敏光（原子核物理学）、松野太郎（気象学・地球物理学）、関谷剛男（薬学・核酸有機化学）、鈴木邦彦（神経化学・遺伝性神経疾患）等の諸会員が集まる。私も学士院幹事として出席している。

日本学士院は明治12年に設立された。PJA は、明治45年に創刊された *Proceedings of the Imperial Academy* を前身として、昭和52年（1977年）に Series A と B に分かれた。米国学士院の *Proceedings of the National Academy of Sciences, USA (PNAS)* が以前そうであったように、会員自身の論文および、会員が紹介する論文はフリーパスで迅速に刊行される習慣だった。現在の PJA-B は、現在の PNAS と同様、厳しいレフェリー・システムをとり、会員自身が著者の Contributed、会員が紹介する Communicated、一般に投稿されたものを会員の1人が editing の責任を持つ Edited (Direct Submission) の3種類がある。論文はレフェリーの承認を得た後に、毎月12日の日本学士院例会の第2部会で紹介され、翌月には出版される。オンライン公開もされる。今やレベルの高い論文が発表される雑誌に様変わりしつつある。国の出版物として著者負担金はない。カラーは1ページ無料、別刷も50部は無料である。やがて PNAS の様に、迅速に多数の論文が出版されるようになることを期待している。

以前、現東京大学谷口維紹教授のインターフェロンの遺伝子の論文が、故黒川利雄会員により紹介され、1979年11月号に迅速に出版された。世界初の研究が国際的に認知される、有利なきっかけになったという話も聞いた。

Science, Nature をはじめ、各領域での専門性の高い、知名度のある雑誌も多い。生化学会からも伝統ある英文誌 *Journal of Biochemistry* が出版されている。その様な雑誌に論文を沢山発表している人が、日本の PJA にも出すようになり、国内外より尊敬されるような雑誌が日本で育つと良い。学士院賞が日本の優れた業績を顕彰し、国の内外で評価されるのと同じ意味を持つと考える。

Medline には2008年より取り込まれている。科学技術振興機構の J-Stage では無料公開されている。パソコン上で検索する人に対応できる。国の内外から論文が集まり、大きく発展するよう希望を抱いている。生化学会の方々の御投稿も期待している。詳しくは <http://www.japan-acad.go.jp/pjab> を参照されたい。

*日本学士院幹事・米国学士院外国人会員、本会名誉会員